

国家工商行政管理総局令

第 74 号

「知的財産権濫用による競争排除・制限行為の禁止に関する規定」は国家工商行政管理総局の局務会議の審議を経て採択されたので、ここに公布し、2015年8月1日より施行する。

知的財産権濫用による競争排除・制限行為の禁止に関する規定

第一条 公平競争を維持し、イノベーションを奨励して、事業者の知的財産権濫用による競争排除・制限行為を制止するために、「中華人民共和国独占禁止法」(以下「独占禁止法」という。)に基づき、この規定を制定する。

第二条 独占禁止法と知的財産権保護は、イノベーションと競争の促進、効率の向上、消費者利益及び社会公共利益の擁護という共通の目標を有する。

事業者が、知的財産権に関する法律、行政法規の規定により知的財産権を行使する行為には、「独占禁止法」を適用しないが、知的財産権を濫用して競争を排除・制限する行為には、「独占禁止法」を適用する。

第三条 この規定で、知的財産権濫用による競争排除・制限行為とは、事業者が「独占禁止法」の規定に違反して知的財産権を行使し、独占的協定を実施し、市場支配的地位を濫用する等の独占的行為をいう(価格における独占的行為は除く)。

この規定で、関連市場とは、関連の商品市場及び関連の地域市場を含むものであり、「独占禁止法」及び「国务院独占禁止委員会の関連市場の定義に関するガイドライン」により定義され、かつ知的財産権、イノベーション等の要素の影響が考慮されたものである。知的財産権許諾等に係る独占禁止法の執行業務において、関連の商品市場は技術市場であっても、特定の知的財産権を含む製品市場であってもよい。関連の技術市場とは、知的財産権の行使に係る技術と相互に代替可能な類似技術との競争から構成される市場をいう。

第四条 事業者同士は、知的財産権行使の方式を利用して、「独占禁止法」第十三条、第十四条に禁止される独占的協定を結んではならない。ただし、取り決めた協定が「独占禁止法」第十五条の規定に該当することを事業者が証明できる場合、この限りでない。

第五条 事業者による知的財産権行使行為が次に掲げる状況のいずれかに該当する場合、「独占禁止法」第十三条第一款第六項及び第十四条第三項で禁止される独占的協定とは認定しないことができる。ただし、当該協定に競争排除・制限の効果があることを証明する反証がある場合、この限りでない。

(一)その行為の影響を受ける関連市場において、競合関係にある事業者の市場シェアの合計が、20%以下であること又は関連市場における適正なコストで取得できる他の独立制御の代替技術が4つ以上あること

(二)関連市場における事業者と取引の相手方の市場シェアが、いずれも30%以下であること又は関連市場に適正なコストで取得できる他の独立制御の代替技術が2つ以上あること

第六条 市場支配的地位を有する事業者は、知的財産権行使の過程において、市場支配的地位を濫用して、競争の排除、制限をしてはならない。

市場支配的地位は、「独占禁止法」第十八条及び第十九条の規定により認定及び推定される。事業者が知的財産権を有していることは、市場支配的地位の認定要因の一つとなり得るが、事業者が知的財産権を有していることだけによって、関連市場に市場支配的地位を有するとは推定されない。

第七条 市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、その知的財産権が生産経営活動の必須構成となっている場合、合理的な条件により当該知的財産権を使用しようとするその他の事業者への許諾を拒絶し、競争の排除、制限をしてはならない。

前款の行為を認定する際に下記の要素を考慮しなければならない

(一)関連市場では当該知的財産権は適正に代替されることができなく、関連市場での競争に参入しようとする他の事業者には必須であること

(二)当該知的財産権の許諾を拒絶すると、関連市場における競争又はイノベーションに不利な影響をもたらし、消費者利益或いは公共利益を損害すること

(三)当該知的財産権の許諾を行っても、当該事業者の不合理な損害には繋がらないこと

第八条 市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、知的財産権行使の過程において、次に掲げる取引制限行為を行い、競争の排除、制限をしてはならない。

(一)取引の相手方が自分とのみ取引を行うよう制限すること

(二)取引の相手方が自分の指定した事業者とのみ取引を行うよう制限すること

第九条 市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、知的財産権行使の過程において、次に掲げる要件に同時に該当する抱き合わせ販売行為を行い、競争の排除、制限してはならない

(一)取引慣例、消費習慣等に反する又は商品の機能を無視し、強制で異なる商品をセット販売或いは組み合わせ販売すること

(二)抱き合わせ販売行為を行うことにより、抱き合わせ販売商品の市場における当該事業者の支配的地位を被抱き合わせ販売商品の市場まで広げ、抱き合わせ販売商品又は被抱き合わせ販売商品の市場における他の事業者による競争を排除・制限していること

第十条 市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、知的財産権行使の過程において、次に掲げる不合理な制限条件を付帯した行為を行い、競争の排除、制限してはならない。

(一)取引の相手方に、その改良した技術の独占的グラントバックを要求すること

(二)取引の相手方がその知的財産権の有効性について、疑義を質すことを禁止すること

(三)許諾協定の期間が満了した後に、取引の相手方が知的財産権を侵害しない状況において、競合商品又は競合技術を使用することを制限すること

(四)保護期間がすでに満了又は無効と認定された知的財産権について、引き続き権利を行使すること

(五)取引の相手方が第三者と取引することを禁止すること

(六)取引の相手方に、その他の不合理な制限条件を付帯すること

第十一条 市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、知的財産権行使の過程において、同じ条件の取引の相手方に対して差別的な扱いを行い、競争の排除、制限してはならない。

第十二条 事業者は、知的財産権行使の過程において、パテントプールを利用して競争の排除・制限行為を行ってはならない。

パテントプールの参加者は、パテントプールを利用して、生産量や市場分割等競争に関する重大な情報を交換し、「独占禁止法」第十三条、第十四条に禁止される独占的協定を結んではならない。ただし、結んだ協定が「独占禁止法」第十五条の規定に該当することを事業者が証明できる場合、この限りでない。

市場支配的地位を有するパテントプールの管理組織は、正当な理由がない限り、パテントプールを利用して、次に掲げる市場支配的地位濫用行為を行い、競争の排除、制限してはならない

- (一) プールの参加者が、独立した許諾者としてプール以外で特許許諾することを制限すること
- (二) プールの参加者又は被許諾者が独自に又は第三者と提携して、プールの特許と競合する技術を開発することを制限すること
- (三) 被許諾者に、その改善又は開発した技術をパテントプールの管理組織又はプールのメンバーに独占的にグラントバックするよう強要すること
- (四) 被許諾者がプールにある特許の有効性について、疑義を質すことを禁止すること
- (五) 同じ条件のプールの参加者又は同じ関連市場の被許諾者に対して、差別的な取引条件を設定する
- (六) 国家工商行政管理総局の認定したその他の市場支配的地位を濫用する行為

この規定でパテントプールとは、2又は2以上の特許権者が各自に所有している特許について、ある種の形式により共同で他の第三者に実施を許諾する協定の措置をいう。その形式としては、それを目的に設立される専門の合併会社であっても、プールのある参加者又はある独立した第三者に管理を委託してもよい。

第十三条 事業者は、知的財産権行使の過程において、標準(国家技術規範の強制的要求を含む。以下同じ。)の制定と実施を利用して、競争の排除・制限行為を行ってはならない

市場支配的地位を有する事業者は、正当な理由がない限り、標準の制定と実施の過程において、次に掲げる競争を排除・制限する行為を行ってはならない。

- (一) 標準の制定の過程において、意図的に標準の策定組織にその権利情報を開示しない又はその権利を放棄すると明確にしたが、ある標準が当該特許権に係る場合、当該標準の実施者にその特許権を主張すること
- (二) その特許が標準の必須特許となった後に、公平、合理的かつ非差別的原則に違反し、実施許諾を拒絶する行為、抱き合わせ販売行為又は取引において不合理な制限条件を付帯する行為等を実施し、競争を排除、制限すること

本規定で標準の必須特許とは、当該標準を実施する上で不可欠な特許をいう。

第十四条 事業者が知的財産権を濫用し競争を排除・制限する容疑がある場合、工商行政管理機関は、「独占禁止法」及び「独占的協定、市場支配的地位濫用事件の摘発手続に関する工商行政管理機関の規定」に準拠して調査を行う。

第十五条 事業者が競争を排除・制限するために知的財産権を濫用する容疑を分析・認定するに当たって、次の手順を取ることができる。

- (一) 事業者による知的財産権行使行為の性質と態様を特定する
- (二) 知的財産権を行使する事業者同士の相互関係の性質を特定する
- (三) 知的財産権の行使に関わった関連市場を定義する
- (四) 知的財産権を行使する事業者の市場地位を認定する
- (五) 事業者の知的財産権行使行為が関連市場における競争に与えた影響を分析する

事業者同士の関係の性質を分析、認定するに当たっては、知的財産権行使行為自体の特徴を考慮する必要がある。知的財産権の許諾に係る場合には、元々競合関係にあった事業者同士は許諾契約において取引関係となり、許諾者と被許諾者が共に当該知的財産権を利用して製品を生産している市場においては、競合関係ともなる。ただし、当事者同士が許諾協定を締結する時点では競合関係がなく、協定を締結して初めて競合関係となった場合には、当初の協定に実質的な変更がない限り、やはり競合者同士の協定とはみなさない。

第十六条 事業者の知的財産権行使行為が競争に与えた影響を分析、認定するに当たっては、次に掲げる要素を考慮しなければならない。

- (一) 事業者と取引の相手方の市場地位
- (二) 関連市場での市場集中度
- (三) 関連市場へ参入する難易度
- (四) 産業慣行及び産業発展段階
- (五) 生産量、地域、消費者等について、制限を加える期間と効力の範囲
- (六) イノベーション促進及び技術の普及に対する影響
- (七) 事業者のイノベーション能力及び技術変化の速度
- (八) 知的財産権行使行為が競争に与えた影響の認定に係るその他の要素

第十七条 事業者が知的財産権を濫用して競争を排除・制限する行為が独占的協定に当たる場合、工商行政管理機関は、違法行為の差止めを命じ、違法所得を没収し、前年度の売上高の1%以上10%以下の罰金を併科する。合意した独占的協定をまだ実施していない場合、50万元以下の罰金に処することができる。

事業者が知的財産権を濫用して競争を排除・制限する行為が市場支配的地位の濫用に当たる場合、工商行政管理機関は、違法行為の差止めを命じ、違法所得を没収し、前年度の売上高の1%以上10%以下の罰金を併科する。

工商行政管理機関は、具体的な罰金額を決定するに当たって、違法行為の性質、情状、程度、継続時間等の要素を考慮しなければならない。

第十八条 この規定の解釈については、国家工商行政管理総局が責任を負う。

第十九条 この規定は、2015年8月1日から施行する。

出典：国家工商行政管理総局公式サイト

【康信コメント】

「知的財産権濫用による競争排除・制限行為の禁止に関する規定」(以下、「本規定」と称す)は、国外の知的財産権保護及び独占禁止規制を参考にして、中国の国情も考慮した上で制定されたものである。専門な執法機構、合理的な執法手続、セーフハーバー等の数多くの洗練した制度や規制を設定した。「本規定」の主な問題について、次のように掲げられている。

第一、セーフハーバーのルールを定めると、競争にとって明らかに不利な影響をもたらす権利行使行為の取締りに有利であり、知的財産権者が自らの関連市場における市場力等の要素により該当関連行為の独占禁止法上の結果を判断するのに有利である。また、事業者が、競争にとって明らかに不利な影響をもたらす権利行使行為を避け、次第に適正な競争へ歩き出すよう導くことができるという。セーフハーバーのルールの適用において、知的財産権の行使について、その他の事業者と協力協議を締結した場合、全体市場における事業者の市場シェアは法律に規定されている比率を超えてはならない、或いは協力協議の関連技術の内容が一定の数のその他の代替技術があるべきである。

第二、事業者が知的財産権を有することは、市場支配的地位の認定の一つの要素になり得るが、事業者が知的財産権を有していることだけに基いて、関連市場における市場支配的地位を有すると推定されることではない。知的財産権者によるライセンス拒否、取引制限、抱き合わせ販売、不合理な制限条件の付帯、差別的な扱い等は、実務上よく発生する具体的な権利濫用行為である。したがって、特許権ライセンス協議を締結する際に、「本規定」の第10条に違反することを避けるべきである。

第三、パテントプール、標準の制定及び実施において、知的財産権行使行為が独占的行為に当たるか否かを判断する際に、パテントプールの参加者が独立したライセンサーとしてプール以外で特許ライセンスすることを制限すること等を含む競争制限行為は、独占的行為に該当し、また、最近の話題になる標準規格必須特許のライセンス問題について、パテントプールの参加者はパテントプールを利用して、生産量や市場分割等競争に関する重要情報を交換し、独占的協議を結んではならない。標準規格必須特許のライセンスについて、クアルコム社のように、業界内の大部分の企業に使用されている標準規格必須特許技術を利用して、勝手に特許ロイヤリティを引き上げることと一部の企業に対して差別的な扱いを行うことをしてはならないという。

第四、知的財産権分野における独占禁止の執法の分析において、「独占禁止法」及び「本規定」に規定された状況に違反するか否かを判断する際に、関連市場行為を行う前に、「本規定」の第15条の分析認定手順に基づき、自らの判断を行い、知的財産権濫用による競争排除・制限行為になるという理由で工商機関より行政処理されることを避けたほうがいい。

最後に、近年来、中国が独占禁止又は知的財産権濫用による競争排除・制限について、権利

者の合法権利に対する保護が強化されてきた。企業が「知的財産権保護」の理由で、競争を排除・制限し、更に市場を独占する行為に対して、その違法所得を没収し、最高額で前年度の売り上げの10%の罰金を科すことができる。また、合意した独占的協議を実施することがなかったとしても、最高額で50万円の罰金を科すことが可能であるという。